

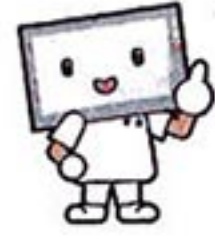
# かんさい



## おたふくかぜで 難聴

都内の小学5年生の男児は昨年8月、おたふくかぜ(流行性耳下腺炎)にかかり、難聴を発症した。病気の回復後も右耳の聴力は戻らず、ほとんど聞こえなくなった。おたふくかぜによる難聴は、2015~16年に全国で少なくとも348人が診断されていたことが日本耳鼻咽喉科学会の調査で判明した。(鈴木希)

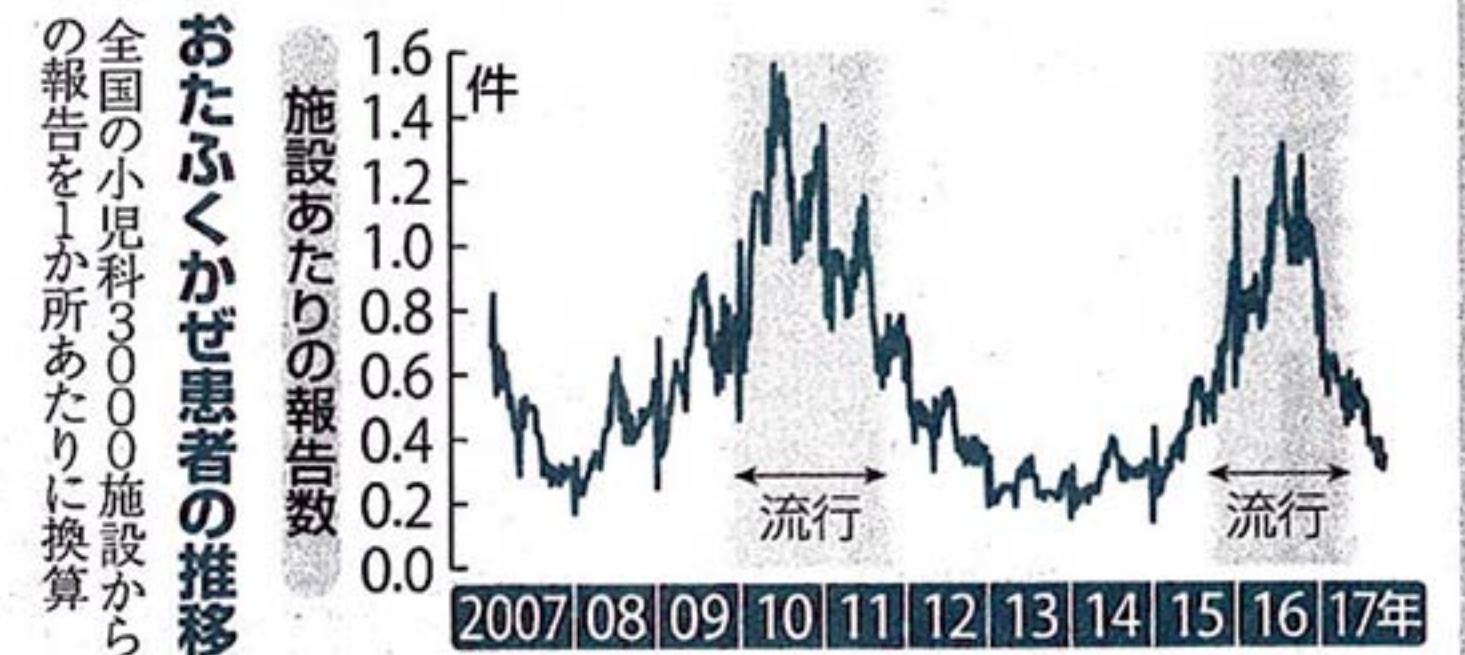
なぜ起きるの?



おたふくかぜはムンプスウイルスの感染で起きる。多くは1~2週間で治るが、ウイルスが脳を包む膜に入ると頭痛や高熱を発する無菌性髄膜炎や、難聴などを伴うことも。ワクチンで90%以上発症を防げるとされている。

難聴は、鼓膜の奥で聴力をつかさどる蝸牛がウイルスでダメージを受けて起きる。調査は今年3月から、全国の耳鼻咽喉科5565施設に対して行われた(回答率64%)。調査結果によると、おたふくかぜによる難聴のうち詳しく調べた336人の7割が20歳未満の子どもだった。子育て世代の30歳代も2割近くを占め

# ワクチンで9割予防



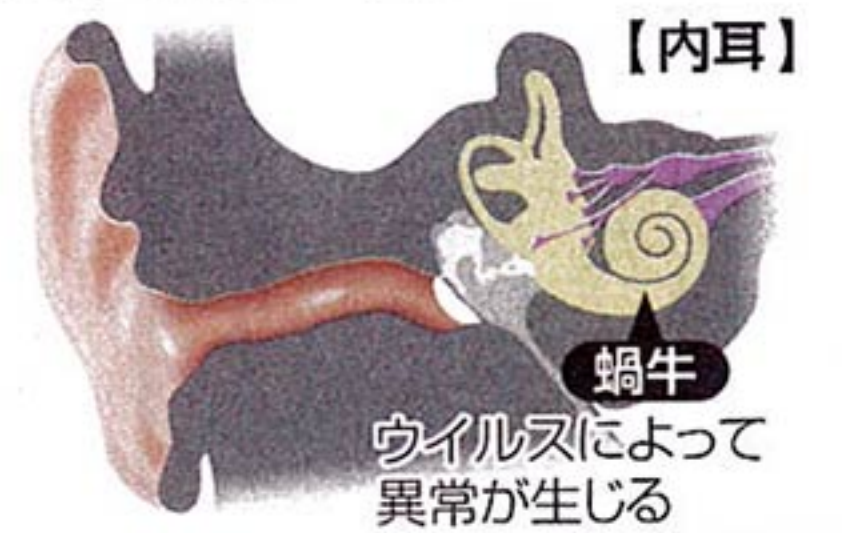
おたふくかぜ患者の推移  
全国の小児科3000施設からの報告を1か所あたりに換算

おたふくかぜの症状と  
予防接種による副作用の頻度の比較  
国のファクトシートから作成

症状	自然感染	ワクチンの副作用
無菌性髄膜炎	1~10%	0.01~0.1%
脳炎	0.02~0.3%	0.0004%
難聴	0.01~0.5%	不明

症状	自然感染	ワクチンの副作用
耳下腺の腫れ	60~70%	3%
顎下腺の腫れ	10%	0.5%
腭(すい)炎	4%	ほとんどなし
睾丸(こうがん)炎	20~40%	ほとんどなし
卵巣炎	5%	ほとんどなし



## 希望者対象低い接種率

た。片耳に後遺症を負った287人のうち9割が重い難聴。両耳の難聴は16人で、人工内耳や補聴器をつけている人もいる。

どんな症状?



都内の男児の右耳の難聴がわかったのは発熱から数日後。横になってテレビを見ながら休んでいて、音が聞こえないと気づいた。

約1年たって慣れてきたが、ザワザワした場所で音が聞き取りにくい。学校で話しかけられたことに気付

「ワクチン接種より、う



けなかったこともあった。男児の母親は「こんな後遺症があると思わなかった。知っていたらワクチンを打つたのに」と悔やむ。

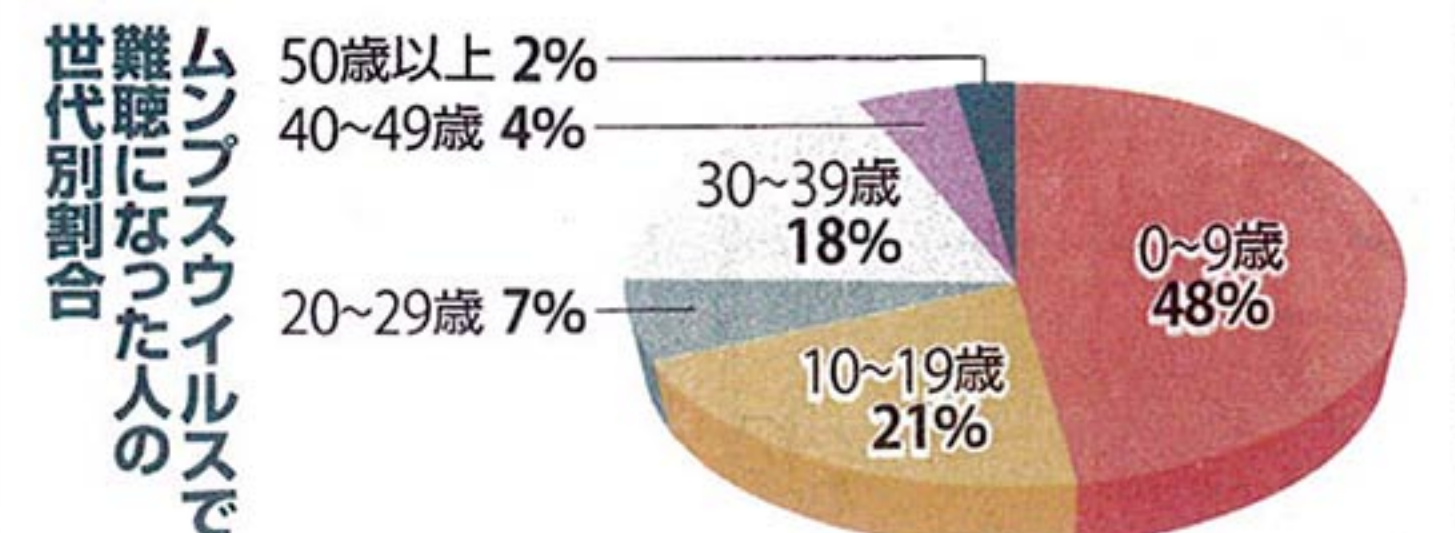
おたふくかぜによる難聴は、炎症を鎮めるステロイド剤の治療でわずかに回復することがあるが、ほとんど治らない。これまでは片耳の聴力が残る人が多いとして、深刻に考えられてこ

つされた方が免疫がついていい」との「うわさ」がある。調査した国立成育医療研究センター耳鼻咽喉科医長の守本倫子さんは、「うつる方がいいというのは間違い。難聴は一生つきあう可能性がある後遺症。ワクチン接種などで予防することが大切です」と話す。

おたふくかぜのワクチンは現在、国が勧める定期接種ではなく、希望者が受けられる任意接種となっている。接種率は3~4割と低い。以前は麻疹、風疹との混合ワクチンで、定期接種とみなされた時期があった。無菌性髄膜炎の副作用が相

次ぎ、1993年にこの混合ワクチンは中止された。厚生労働省の研究班による2003年度の報告では、おたふくかぜで無菌性髄膜炎が起るのは患者の1・24%だったが、ワクチンの副作用の無菌性髄膜炎は接種者の0・03~0・06%にとどまった。

だが一度、問題とされたワクチンを、再び定期接種にするのは難しい。海外の製品も効果の持続性に課題があるという。国は定期接種化を目指し、新たなワクチン開発を製薬会社に促している。感染症に詳しい川崎市健康安全研究所長の岡部信彦さんは「現在のおたふくかぜワクチンも、多くの人が受けるよう、ワクチンの重要性を理解してもらいたい」と指摘する。



ムンプスウイルスで難聴になった人の世代別割合